The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	動詞テ形に由来する副詞的成分の「副詞度」算出の試み
Author(s)	林, 雅子
Citation	阪大日本語研究. 2008, 20, p. 33-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5382
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』20（2008）

動詞テ形に由来する副詞的成分の「副詞度」算出の試み

An attempt to calculate the Adverbial Degree
in *te*-verb form Adverbial Derivatives

林　雅子
HAYASHI Masako

キーワード：副詞度・副詞・動詞テ形・副詞的成分・副詞の種類

【要旨】

現代日本語の「動詞テ形由来の副詞的成分」について、形態・意味・統語の三つの特徴に基づいてその「副詞度」を算出し、その連続相を多次元的に把握することを試みた。その結果、副詞度と副詞の種類との間には、以下のような相関が見出された。「陳述」と「時・頻度」の副詞度が最も大きく、次いで、「意志態度」「程度」「接続」がこの順で続き、「主体の心理」「主体の様子」「複数主体の様子」（「状態修飾成分」）の副詞度は小さい。また、「陳述」「時・頻度」「程度」「接続」は、これらを副詞と見なす研究者が多く、辞書で副詞として認定されるものが多いのに比べて、主体の心理・様子を表わす「状態修飾成分」は、これらを副詞とは見なさい研究者も多く、辞書でも副詞として認定されにくい、という傾向を得た。これらの結果は、「副詞度」の大きさと、「各研究者の副詞認識」「辞書編纂者の副詞認識」とが、一定の相関関係にあることを示している。

1．「副詞度」の必要性

副詞には、動詞・形容詞・名詞など、他の品詞に由来するものが多く存在する。動詞の場合はテ形に由来するものが非常に多く、その存在は先行研究でも指摘されているが、そこで挙げられる語例の副詞的な度合い（副詞度）には様々な段階があると思われる。

動詞から副詞に移行しはじめている、あるいは移行しているものには、動詞の第二なかどめからのものがおおい。たとえば、「とんで、すすんで、あらそって、きそって、きどって、よろこんで、だまって、きわめて、あまんじて、あわてて、いたって」な

ど。　　（新川（1996）：12）

これらを、20冊の辞書（巻末参照）で調べてみると、「きわめて」はすべての辞書が副詞としているが、「だまって」「あわてて」は副詞として見出しを立てる辞書が一つもなく、「すすんで」「よろこんで」は辞書によって副詞認定にばらつきがあった。このように、同じテ形由来の副詞的成分でも、辞書に「副詞」として立項される語もあればされない語もあり、その副詞的な度合いには様々な段階があると予想される。

実際、新川（1996）が挙例の前に「動詞から副詞に移行しはじめている、あるいは移行しているもの」と述べているように、これらは、「品詞としての副詞である」のか「副詞ではない（動詞の一活用形である）」のか、はっきりした線は引けないのが現実なのである。

この点については、鈴木（1972）も、「副詞化の度あいにはいろいろある。すでに副詞に移行してしまったものもあるし、副詞にちかづいているだけのものもあって、副詞であるか、名詞、動詞の特定の変化形であるかのあいだには、はっきりした線はひけない」としている。また、工藤（1980）も、「副詞への移行の度合いは連続的に様々な段階があり、境界に一線を引くことはむつかしい」とし、宮島（1972）も、「品詞が文法的性質の束であるからには、1つの品詞のなかにいろんなタイプがみとめられること、そして1つの品詞と他の品詞とのあいだは飛躍的ではなく連続的であり、最後に2つの品詞をわけるものとして引かれる1線はほとんど便宜的なものでしかないことは確かである」と述べている。

このような指摘からも分かるように、テ形由来の副詞的成分は、動詞らしいものから副詞らしいものまで連続的であり、動詞か副詞かという二分法で分けることを目指すよりも、動詞から副詞への連続がどのような様相を示すのかを探求するのが正しい態度である。しかし、従来の研究では、副詞的な度合いにはいろいろあるとされるだけで、動詞から副詞への連続相について、その実態が調べられることはなかった。

以上のような問題意識に立って、本稿では、現代の日本語で使用されている動詞テ形由来の副詞的成分を対象に、それらの副詞らしさを表す尺度として「副詞度」を考案・算出し、その連続相の実態を具体的に提示した上で、それらと、従来の副詞研究で指摘されてきた「副詞分類（副詞の種類）」や「辞書における副詞認定状況」との関係を探ることを目的とする。

2．テ形の副詞的成分の規定

本稿ではこれ以降「動詞のテ形に由来する副詞（的成分）」を単に「テ形の副詞的成分」と呼ぶ。「副詞」ではなく「副詞的成分」と呼ぶのは、それらの動詞から副詞への連続相を把握しようとするためである[1)]。以下、この用語の表す内容と範囲を説明する。

動詞のテ形は、下例のように、文中で中止の機能を担う。

太郎は学校へ行って、友達と話した。

一方、次の例のように文中で副詞的機能を担うものがある。

太郎は話す。

太郎はゆっくり話す。

太郎は急いで話す。

「話す」という動詞だけでは、どのようなあり方で話したのかが分からないが、「ゆっくり話す」というように「ゆっくり」という成分を付加し表現することで、「話す」という動きのあり方が限定され詳しく説明される。この「ゆっくり」のように、動きのあり方を限定し詳しく修飾する成分は、一般的に「副詞」と呼ばれている。「急いで話す」という例も、「急いで」という成分を付加し表現することで、「話す」という動きのあり方が限定され詳しく説明されているので、「急いで」は「ゆっくり」と同様、副詞と見なされてよい。

本稿でいう「テ形の副詞的成分」には、まず、このように、文中で副詞として機能するテ形のうち、「単独で動きや事態のあり方を限定し詳しく修飾するもの」を含むことにする。

このほか、「はたして」のようにいわゆる「陳述副詞」に相当する機能を持つもの、「きわめて」のように「程度副詞」に相当する機能を持つもの、「したがって」のように「接続詞」に相当する機能を持つものも、これまでの先行研究によって副詞と見なされており、ここでいう「テ形の副詞的成分」に含めることにする。また、先行研究で副詞として言及されることは少ないが、動きを表わさず、主節に対して従属的に働く成分で、単独で使用されているものも含めることにする。「明けて三年の春」「締めて三千円になります」などである[2)]。

なお、上の「ゆっくり」の類を品詞論的にどう扱うかには諸説あり、中にはこれらを活用の不完全な「形容詞」と見る川端（1983）や、「情態詞」として体言と見る渡辺（1971）などもある[3)]。「ゆっくり」と同様「急いで」の類も品詞論的にどのように扱うかには諸説あり、奥田（1989）は副詞として扱っているが、渡辺（1971）は「用言（動詞）」とし、川端（1983）は「形容詞」とする。このように、副詞は、「品詞論のはきだめ」ともいわれるように、各研究者によってその扱いが大きく異なるのが現状である。しかし、「副詞」

の定義を定めその内実を明らかにしてからでなければ研究が出来ないというのであれば、副詞研究は進展していかない。本稿は、副詞の品詞論的定義を明確にすることを最終目的とするものではなく、単独で副詞的機能を担う成分の連続相の実態を捉えることを目的とするものであるから、副詞の定義や範囲規定にこだわらず、先行研究において副詞として言及されているテ形の副詞的成分を可能な限り広く対象とする。

3．分析対象の選定方法

巻末に挙げた調査資料の〔一次資料〕から、「テ形の副詞的成分」をすべて取り出す。その際、以下のものは対象から外した。

1）中止用法と副詞用法の両方に解釈できるもの
2）後続の動詞との組み合わせにより副詞用法となるもの（～して見える、～して見せる、～して聞こえる、等）
3）格が省略されて一語化しているもの（なみだながして、脚ふんばって、汗水たらして、等）
4）副詞用法の前に何らかの要素があり単独ではないもの（２３日つづけて、等）
5）「～として」の形をとるもの（時として、主として、等）
6）「～にして」の形をとるもの（往々にして、一瞬にして、等）
7）「～もって」の形をとるもの（前もって、今もって、等）
8）「指示表現＋動詞」のテ形をとるもの（こうして、こうやって、等）
9）「漢語＋して」の形をとるもの（苦労して、協力して、等）
10）「副詞＋して」の形をとるもの（にこにこして、しばらくして、等）
11）複合的なもの（えてして、かててくわえて、等）
12）その他（二人して、期せずして、等）

なお、後続の句や文が省略されていて、副詞的成分がどのような働きをしているか判別できないものも対象から除いた。

以上の基準で〔一次資料〕を対象に調査した結果、テ形の使用例延べ約４万のうち、単独副詞用法を持つものは異なりで約100語あった。本稿は本格的調査への予備的・探索的段階にあるので、いくつかの語に対象を絞らざるをえない。その際、できるだけ多様な副詞を対象にするために、先行研究を参考に設定した以下の「副詞の種類」から、用例数の

多いものを中心に5語ずつ選んで対象とすることにした[4]。今回対象としなかった語については、今後さらに調査分析していく予定である。

1．事態全体に対する言表主体の捉え方を表わすもの（いわゆる陳述副詞に相当する副詞的成分：以下「陳述」と略称）
2．後続の形容表現の程度をより詳しくするもの（いわゆる程度副詞に相当する副詞的成分：以下「程度」と略称）
3．文や事態の間をつなぐもの（いわゆる接続詞に相当する副詞的成分：以下「接続」と略称）
4．後続の動詞を詳しく限定修飾するもの（いわゆる情態副詞に相当する副詞的成分）
　4.1. 時や頻度に関わるもの（以下「時・頻度」と略称）
　4.2. 意志態度や意図性に関わるもの（以下「意志態度」と略称）
　4.3. 主体の内的状態（心理）を表わすもの（以下「主体の心理」と略称）
　4.4. 主体の外的状態（様子）を表わすもの（以下「主体の様子」と略称）
　4.5. 複数の主体の外的状態（様子）を表わすもの（以下「複数主体の様子」と略称）
5．その他
　場面の展開を表わすもの：あけて、こえて
　数量を引き出すもの：あわせて、しめて
　「～して言えば（言うと）」などの形で発話の態度を表わすもの：うらがえして、たとえて
　話し方・考え方を表わすもの：かいつまんで、たちいって、つっこんで

分類5の「その他」を除き、分類1から分類3までの上位分類3つと、分類4の下位分類5つをあわせて、8つの「副詞の種類」から、それぞれ5語ずつ選び、合計40語を分析対象語とする。分析に耐えうる充分な数が必要なため、使用度数20以下のものは、〔二次資料（巻末参照）〕からも調査し、〔一次資料〕における調査結果の数値とあわせて提示する[5]。

4．副詞度の尺度

テ形の副詞的成分の副詞度を測るには、形態・意味・統語の三つの尺度を用いることが必要であると考えられる[6]。すなわち、テ形の副詞的成分以外にもとの動詞の他の活用形

がどれほど使われているか（テ形が副詞用法にどれほど固定的であるか）という「形態的副詞度」、テ形の副詞用法と動詞用法との間に意味的な隔たりがどれほどあるかという「意味的副詞度」、テ形が、格や他の成分と複合的に副詞句を構成するのではなく、単独で副詞用法を持つことがどれほどあるかという「統語的副詞度」である。それぞれの具体的な測定方法は次節に述べるが、副詞度を計る尺度としてこれらが妥当であることは、先行研究の指摘からも確認できる。『国語学大辞典』の「副詞」の項目には、以下のようにある[7]。

> 副詞には、体言や用言の特定の語形（いわゆる文節の形）から移行してきたものがかなり多い。(略)「極めてむつかしい」（(略) 奥義を極めて…）などのように、連用修飾の形が独自に意味および機能に変化をきたして、活用や格変化のシステムからはみだしてきたものが多い（略)。

また、奥田（1989）には、「副詞化の完成と同時に、つまり副詞化した第二なかどめは単独で定形動詞に直接かかわっていく」とある。さらに、渡辺（1971）には、他の成分によって修飾されないものを副詞と見なすとある。

> 従来「副詞」または「副用語」、その他要するに「体言、用言」以外の自立語を指した呼び名のすべては、意義的に見て、大体ここで言う修飾限定されない成分に相当する単語を呼ぶものであったと理解される。と言うより、形態意義職能的に単語と認定され、しかもこのような修飾限定されない成分に該当するということが、本書で「副詞」と呼ぶものの特徴の一つだと言ってもよい。(p.218)

このほか、高橋（2003）や新川（1996）などでも、「活用形が固定的であるか否か」の形態的側面、「意味的に隔たりがあるか否か」の意味的側面、「単独で副詞用法を持ち得るか否か」の統語的側面、が指摘されている。ほかに、国立国語研究所の語彙調査などで「同語か異語かの判別」が行われる際にも、テ形の副詞的成分の「形態的な固定性」と「意味的な隔たり」とが基準となっている[8]。

なお、副詞度の尺度として、辞書における副詞の認定状況を利用するという方法も考えられるが、これには問題がある。動詞から副詞へと一次元的に並べるということが正しいのかの保証が無く、たとえ一次元的に並べ得たとしても、そのように並ぶ理由が説明できない。また、辞書には紙面の制約など、商業出版における様々な事情がからんでいるので、辞書に載るか載らないかの収載状況が副詞度を直接反映しているとは限らないからで

ある。

このように、辞書のみで副詞度を測ることはできないが、しかし必ずしも、辞書の副詞認定状況がまったく副詞らしさを反映していないとも言えない。辞書の情報は、あくまでも副次的なものではあるが、「辞書編纂者の副詞認識」を見るための参考情報として利用する。

5．副詞度の測定方法

前節で述べた三つの尺度について、それぞれの具体的な測定方法を述べる。

5. 1. 形態的副詞度

形態的副詞度は、テ形の副詞的成分のうち、格や他の成分と複合的に副詞句を構成するのではない「単独副詞用法」のテ形について、もとになる動詞の総使用数（表１の「他の活用形の使用数」と「単独副詞用法の使用数」の和）に対するその割合によって測る。もとになる動詞の総使用数には、格や他の成分と複合的に副詞句を構成する「非単独副詞用法」のテ形は含まれていない。

形態的副詞度＝単独副詞用法のテ形の使用数÷もとになる動詞の総使用数

たとえば、「かえって」の単独副詞用法は185例、他の活用形の使用数は34例あるので、その形態的副詞度は185÷（34＋185）＝0.84（84％）となる。一方、「だまって」の単独副詞用法は339例、他の活用形の使用数は216例あるので、その形態的副詞度は339÷（216＋339）＝0.61（61％）となる。

活用形の範囲には諸説あるが、ここではいわゆる学校文法の活用形に狭く限定するのではなく、助動詞を下接しているものやテイル形なども含め、範囲を広く取った。これは、助動詞を下接しているものなども、同じ動詞の意味を共有する連合関係にあると考えるからである。ただし、複合動詞や補助動詞の前項になるものは除いた[9]。

表１（６節）の「他の活用形数の使用数」とは、上記の基準によって計量したすべての活用形の使用数から「単独副詞用法」「非単独副詞用法」の使用数を除いたものである。中止の機能を担うテ形は、副詞用法ではなく動詞の一活用形であるため、「他の活用形の使用数」の中に含めた[10]。また、連用形と同形の名詞、連用形由来の副詞や、「～ての・～てから」など助詞を下接するものは「他の活用形の使用数」には含めなかった。

5. 2. 意味的副詞度

意味的副詞度は、「単独副詞用法」のテ形について、もとの動詞との間に意味的な隔たりがある使用の数を調べ、単独副詞用法のテ形の使用数全体に対するその割合によって測る。

意味的副詞度＝意味的に隔たりがあるものの使用数÷単独副詞用法の総使用数

例えば、「かえって」の単独副詞用法は185例、意味的に隔たりがあるものは185例あるので、その意味的副詞度は185÷185＝1（100％）となる。一方、「だまって」の単独副詞用法は339例、意味的に隔たりがあるものは21例あるので、その意味的副詞度は21÷339＝0.06（6％）となる。

意味的に隔たりがあるか否かの判定には、以下のテストフレームを用いた。すなわち、「テ形に文末のムード・テンス・肯否・アスペクト・ヴォイスを遡及させた例文を作り、そこで文を終止させたとき、非文となれば意味的に隔たりがあると見なす」というものである。語順が入れ替わっている場合は、元の語順に戻した上で判定する。たとえば、

・物質的な「ゆとり」が増すにつれて、精神的な「ゆとり」はかえって減る。

＊物質的な「ゆとり」が増すにつれて、精神的な「ゆとり」はかえる。

のような場合は、テ形の副詞的成分の後で文を終止すると元の文とは著しい隔たりがあるので、意味的な隔たりがあるものとして数える。しかし、

・門番は首を曲げ、黙ってしばらく僕の顔を見ていた。

○門番は首を曲げ、黙っていた。

のような場合は、テ形の副詞的成分の後で文を終止しても元の文とはさほど意味が異ならないので、意味的な隔たりがあるものとしては数えない[11]。

5. 3. 統語的副詞度

副詞らしさと動詞らしさとの違いの一つに、動詞は格を取り、他の成分によって修飾されるが、副詞は格を取らず、他の成分によって修飾されない（されにくい）という点がある[12]。格や他の成分と複合的に副詞句を構成している非単独副詞用法のテ形はより動詞らしく、単独副詞用法のテ形はより副詞らしいということである。したがって、統語的副詞度は、テ形の副詞的成分の総使用数（単独副詞用法と非単独副詞用法の和）に対する単独副詞用法の使用数の割合によって測る。

統語的副詞度＝単独副詞用法の使用数÷テ形の副詞的成分の総使用数

たとえば、「かえって」の単独副詞用法は185例、非単独副詞用法は0例あるので、その統語的副詞度は185÷（185＋0）＝1（100％）となる。一方、「だまって」の単独副詞用法は339例、非単独副詞用法は11例あるので、その統語的副詞度は339÷（339＋11）＝0.97（97％）となる。

非単独副詞用法とは、その前接成分がテ形由来の副詞的成分のみにかかる場合だけを指し、「テ形由来の副詞的成分＋後続動詞」全体にかかるものは含めない。たとえば、「ひどく急いで帰った」の場合、「ひどく帰った」とは言えないように、「ひどく」は「急いで」にかかっているので、これは非単独副詞用法とする。一方、「まるで好んでそうしているようだ」の場合、「まるで」は「好んでそうしている」全体にかかっているので、この場合の「好んで」は「まるで」に限定修飾されている非単独副詞用法ではなく、単独副詞用法となる[13]。

また、非単独副詞用法は、単独副詞用法の場合と同じ副詞用法をもつものに限ることとし、同じ用法ではないものは他の活用形の使用数に合算する。たとえば、「したがって」の単独副詞用法は「試験問題は一切公表されていない。しがたって、見当がつかなかった」のように、すべて接続副詞の用法であるため、「彼女のあとにしたがって歩いた」のような単独副詞用法と意味用法の異なる用法は、非単独副詞用法としては数えない。

6．結果

以上の方法で調査した結果を表1に示す。形態・意味・統語の各副詞度についてはz評点を算出し、それを7段階に区分された評定尺度に位置づけた[14]。これによって、尺度の異なる3つの指標を直接比較することが可能となる。表1最右列には、それぞれのテ形副詞的成分について、本稿末尾に挙げる辞書20冊での副詞認定状況を掲げた。一つの辞書で、見出し（小見出しも含む）に立てられ、かつ、副詞或いは接続詞として品詞表示されていれば2点、見出しに立てられているが連語とされ、副詞（或いは接続詞）と認定されていなければ1点、見出しに立てられていなければ0点を与え、テ形の副詞的成分ごとに合計点を出したものである[15]。

表１　調査結果

副詞の種類	一次資料のみ	一次二次資料	テ形の副詞的成分	形態				意味				統語					合計		辞書副詞認定状況
				他の活用形の使用数	副詞度	z評点	評定尺度	意味的に隔たりがあるものの使用数	副詞度	z評点	評定尺度	単独副詞用法の使用数	非単独副詞用法の使用数	副詞度	z評点	評定尺度	副詞度	評定尺度	
1陳述	○		かえって	34	0.84	1.94	7	185	1.00	0.90	5	185	0	1.00	0.69	5	2.84	17	40
	○		はたして	110	0.59	0.96	5	158	1.00	0.90	5	158	0	1.00	0.69	5	2.59	15	40
	○		せめて	46	0.52	0.70	5	50	1.00	0.90	5	50	0	1.00	0.69	5	2.52	15	37
	○		まして	109	0.25	-0.34	4	36	1.00	0.90	5	36	0	1.00	0.69	5	2.25	14	40
	○		きまって	343	0.08	-0.98	3	30	1.00	0.90	5	30	0	1.00	0.69	5	2.08	13	32
2程度	○		きわめて	38	0.89	2.11	7	308	1.00	0.90	5	308	0	1.00	0.69	5	2.89	17	40
		○	いたって	1746	0.05	-1.09	3	97	1.00	0.90	5	97	0	1.00	0.69	5	2.05	13	37
		○	きわだって	201	0.20	-0.53	3	32	0.64	0.08	4	50	1	0.98	0.55	5	1.82	12	0
		○	とびぬけて	17	0.48	0.56	5	11	0.69	0.19	4	16	0	1.00	0.69	5	2.17	14	3
		○	ずばぬけて	18	0.44	0.38	4	9	0.64	0.09	4	14	0	1.00	0.69	5	2.08	13	0
3接続	○		したがって	205	0.57	0.89	5	271	1.00	0.90	5	271	0	1.00	0.69	5	2.57	15	39
	○		ついで	28	0.62	1.08	5	46	1.00	0.90	5	46	3	0.94	0.26	4	2.56	14	36
	○		つづいて	651	0.06	-1.04	3	40	0.89	0.65	5	45	8	0.85	-0.38	4	1.80	12	4
		○	くわえて	2110	0.08	-0.99	3	175	1.00	0.90	5	175	92	0.66	-1.74	2	1.73	10	10
		○	ひるがえって	109	0.23	-0.42	3	32	1.00	0.90	5	32	1	0.97	0.47	5	2.20	13	32
4.1時・頻度	○		はじめて	525	0.54	0.77	5	612	1.00	0.90	5	612	0	1.00	0.69	5	2.54	15	39
	○		あらためて	43	0.83	1.89	7	215	1.00	0.90	5	215	6	0.97	0.50	5	2.81	17	32
	○		あいついで	109	0.31	-0.12	4	42	0.88	0.62	5	48	0	1.00	0.69	5	2.18	14	12
		○	かねて	344	0.41	0.27	4	236	1.00	0.90	5	236	0	1.00	0.69	5	2.41	14	40
		○	かさねて	1181	0.14	-0.75	3	195	1.00	0.90	5	195	2	0.99	0.62	5	2.13	13	39
4.2意志態度	○		おもいきって	5	0.88	2.05	7	27	0.77	0.38	4	35	0	1.00	0.69	5	2.65	16	26
	○		しいて	36	0.44	0.38	4	28	1.00	0.90	5	28	0	1.00	0.69	5	2.44	14	39
	○		すすんで	397	0.06	-1.04	3	27	1.00	0.90	5	27	0	1.00	0.69	5	2.06	13	24
	○		つとめて	63	0.27	-0.27	4	23	1.00	0.90	5	23	0	1.00	0.69	5	2.27	14	40
		○	このんで	517	0.16	-0.67	3	85	0.86	0.58	5	99	8	0.93	0.16	4	1.94	12	37
4.3主体の心理	○		あわてて	44	0.79	1.71	6	0	0.00	-1.37	2	162	5	0.97	0.48	5	1.76	13	0
	○		よろこんで	155	0.16	-0.67	3	8	0.27	-0.77	3	30	5	0.86	-0.32	4	1.29	10	6
		○	おちついて	1839	0.08	-0.97	3	0	0.00	-1.37	2	165	25	0.87	-0.24	4	0.95	9	0
		○	あらたまって	219	0.22	-0.46	3	6	0.10	-1.15	2	61	5	0.92	0.15	4	1.24	9	0
		○	かしこまって	67	0.27	-0.25	4	0	0.00	-1.37	2	25	5	0.83	-0.49	3	1.11	9	0
4.4主体の様子	○		だまって	216	0.61	1.04	5	21	0.06	-1.23	2	339	11	0.97	0.47	5	1.64	12	0
	○		いそいで	167	0.39	0.19	4	3	0.03	-1.31	2	106	4	0.96	0.43	5	1.38	11	0
	○		わらって	682	0.05	-1.10	3	0	0.00	-1.37	2	36	32	0.53	-2.63	1	0.58	6	0
		○	ないて	2278	0.04	-1.14	2	0	0.00	-1.37	2	88	5	0.95	0.31	4	0.98	8	0
		○	ほほえんで	728	0.03	-1.16	2	0	0.00	-1.37	2	25	18	0.58	-2.26	1	0.61	5	0
4.5複数主体の様子	○		ならんで	222	0.19	-0.56	3	0	0.00	-1.37	2	52	33	0.61	-2.05	1	0.80	6	0
	○		そろって	40	0.39	0.22	4	3	0.12	-1.11	2	26	12	0.68	-1.54	2	1.19	8	0
		○	むかいあって	457	0.20	-0.54	3	0	0.00	-1.37	2	111	49	0.69	-1.47	2	0.89	7	0
		○	かたまって	318	0.10	-0.90	3	4	0.11	-1.12	2	36	26	0.58	-2.27	1	0.79	6	0
		○	まとまって	603	0.03	-1.16	2	2	0.10	-1.15	2	20	5	0.80	-0.72	3	0.93	7	0

7．分析

表２は、テ形の副詞的成分を、表１の合計評定尺度の大きい順に、かつ、副詞の種類に分けて表示し、形態・意味・統語の各副詞度と辞書の副詞認定状況の点数も示したものである。最下行には、副詞の種類ごとに、合計評定尺度の平均値のほか、形態・意味・統語の各副詞度と副詞認定状況についてもその平均値（小数部第１位を四捨五入）を記した。

表２　副詞度と副詞の種類の関係

合計評定尺度	陳述	形態	意味	統語	辞書	時・頻度	形態	意味	統語	辞書	程度	形態	意味	統語	辞書	意志態度	形態	意味	統語	辞書	接続	形態	意味	統語	辞書	心理	形態	意味	統語	辞書	様子	形態	意味	統語	辞書	複数主体様子	形態	意味	統語	辞書
17	かえって	7	5	5	40	あらためて	7	5	5	40	きわめて	7	5	5	40																									
16																おもいきって	7	4	5	25																				
15	はたして	5	5	5	40	はじめて	5	5	5	39											したがって	5	5	5	39															
	せめて	5	5	5	37																																			
14	まして	4	5	5	40	かねて	4	5	5	40	とびぬけて	5	4	5	3	つとめて	4	5	5	40	ついで	5	5	4	36															
						あいついで	4	5	5	12						しいて	4	5	5	39																				
13	きまって	3	5	5	32	かさねて	3	5	5	39	いたって	3	5	5	37	すすんで	3	5	5	24	ひるがえって	3	5	5	32	あわてて	6	2	5	0										
											ずばぬけて	4	4	5	0																								
12											きわだって	3	4	5	0	このんで	3	5	4	37	つづいて	3	5	4	4						だまって	5	2	5	0					
11																															いそいで	4	2	5	0					
10																					くわえて	3	5	2	10	よろこんで	3	3	4	6									
9																										かしこまって	4	2	3	0										
																										おろかで、あらたまって	3	2	4	0										
8																															ないて	2	2	4	0	そろって	4	2	2	0
7																																				むかいあって	3	2	2	0
																																				まとまって	2	2	3	0
6																															わらって	2	2	1	0	かたまって	3	2	1	0
																																				ならんで	3	2	1	0
5																															ほほえんで	2	2	1	0					
平均	14.8	5	5	5	38	14.6	5	5	5	34	13.8	4	4	5	16	13.8	4	5	5	33	12.8	4	5	4	24	10.0	4	2	4	2	8.4	3	2	3	0	6.8	3	2	2	0

7. 1. 副詞度と副詞の種類との相関（群間比較）

表２から分かるように、テ形の副詞的成分の「副詞度」と「副詞の種類」との間には、一定の相関関係がみてとれる。すなわち、「陳述」と「時・頻度」は、合計評定尺度の平均値も（14.8、14.6と）最も大きく、また、形態・意味・統語の各副詞度の平均値もいずれも５点代で、最も副詞らしい類といえる。次いで、「意志態度」「程度」「接続」がこの順で続く[16]。最後に、「主体の心理」「主体の様子」「複数主体の様子」が続くが、これらは合計評定尺度の値も（10.0、8.4、6.8と）小さく、最も副詞らしくない類といえる。

「主体の心理」「主体の様子」「複数主体の様子」がこの順となるのは、非単独副詞用法の多少による統語的副詞度の違いによるものと考えられる。これらは、また、主体の内的ないし外的な状態を表わしつつ、後続動詞の状態的側面を修飾するという「状態修飾の機能」を担っている点で共通している（以下の記述で、これら３種をひと括りにして「状態修飾成分」と呼ぶことがある[17]）。

「程度」の副詞度は、「陳述」「時」「頻度」「意志態度」よりも小さく、「接続」「状態修飾成分」より大きくなっている。工藤浩（1983）は、程度副詞を、陳述的側面と、いわゆる情態副詞がもつことがら的側面とをもつ二重性格的なものとして位置づけている。表２でも、「陳述」と「状態修飾成分」との大きな対立に対して、「程度」は両者の中間に位置している。

「接続」の副詞度が、「状態修飾成分」よりは大きいものの、「陳述」「時・頻度」「意志態度」「程度」より小さくなっているのは、格をとる表現があるために統語的副詞度がこれらより小さくなるからと考えられる。

「時・頻度」や「意志態度」の平均副詞度は、「程度」「接続」「状態修飾成分」よりも大きい。「時・頻度」については、いわゆる情態副詞の中での異質性が注目され、川端（1964）をはじめ、多くの研究者によって、他の状態修飾成分とは分けて考えられている。

しかし、「意志態度」は「状態修飾成分」と括られていることが多い（益岡・田窪（1992）中右（1980）仁田（2002）など[18]）。「状態修飾成分」は、「急いで話さない」（[急いで話す］ことをしない）というように、ほとんどが否定のスコープに入るが、「意志態度」は、「しいて話さない」（「しいて［話す］ことをしない」「［しいて話す］ことをしない」）というように、すべてが否定のスコープに入るとは限らないという違いがある。意志態度と状態修飾成分が連続することは確かであるが、このような文法的性質の違いを重く見て分けて考えるべきだと思われる。副詞度の大きさが非常に異なる点も、両者を分けて考えるべきであることを支持している。

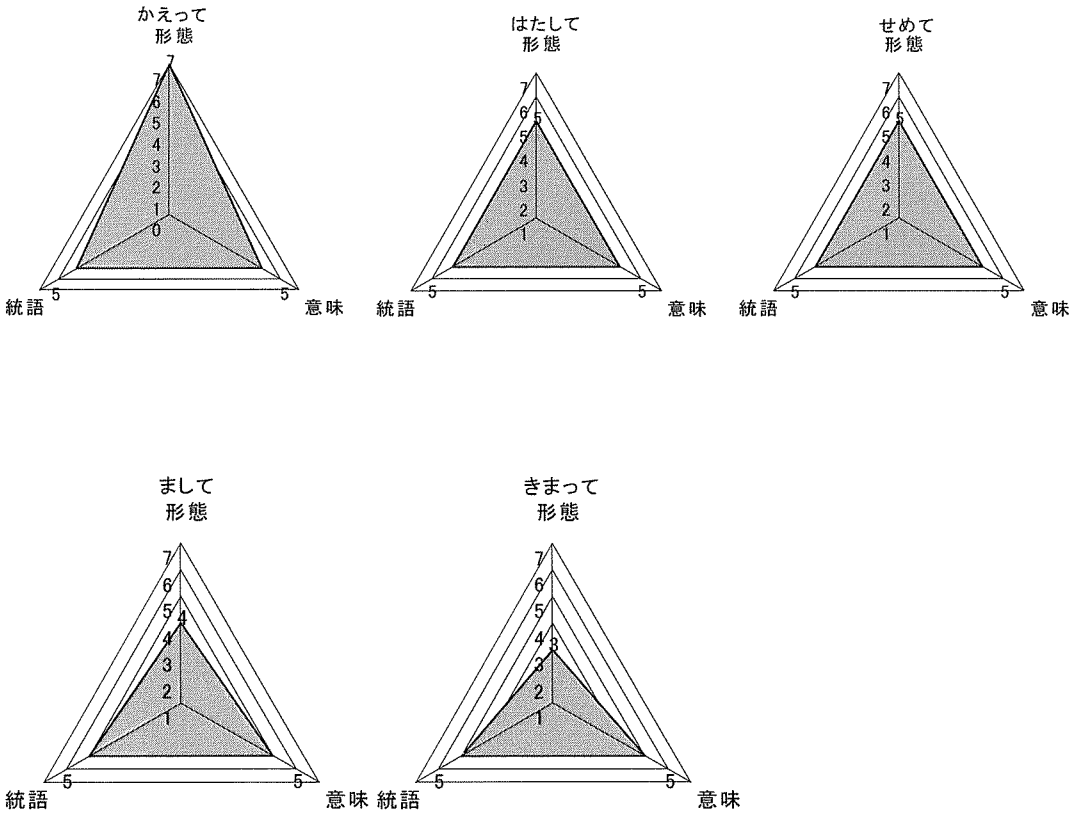
表２からは、また、副詞度と副詞の種類との相関関係に、辞書の副詞認定状況もかかわっていることがわかる。すなわち、副詞度の大きい「陳述」「時・頻度」「意志態度」は、

副詞認定状況の得点も最も大きい。逆に、副詞度の小さい「状態修飾成分」は、副詞認定状況の得点も（「よろこんで」を除いて[19]）すべて0点である。副詞度が両者の間にある「程度」「接続」は、副詞認定状況の得点が高いものもあるが、低いものや0点のものもあり、この点でも両者の中間に位置している。

7. 2. 副詞の種類内での副詞度の連続相（群内比較）

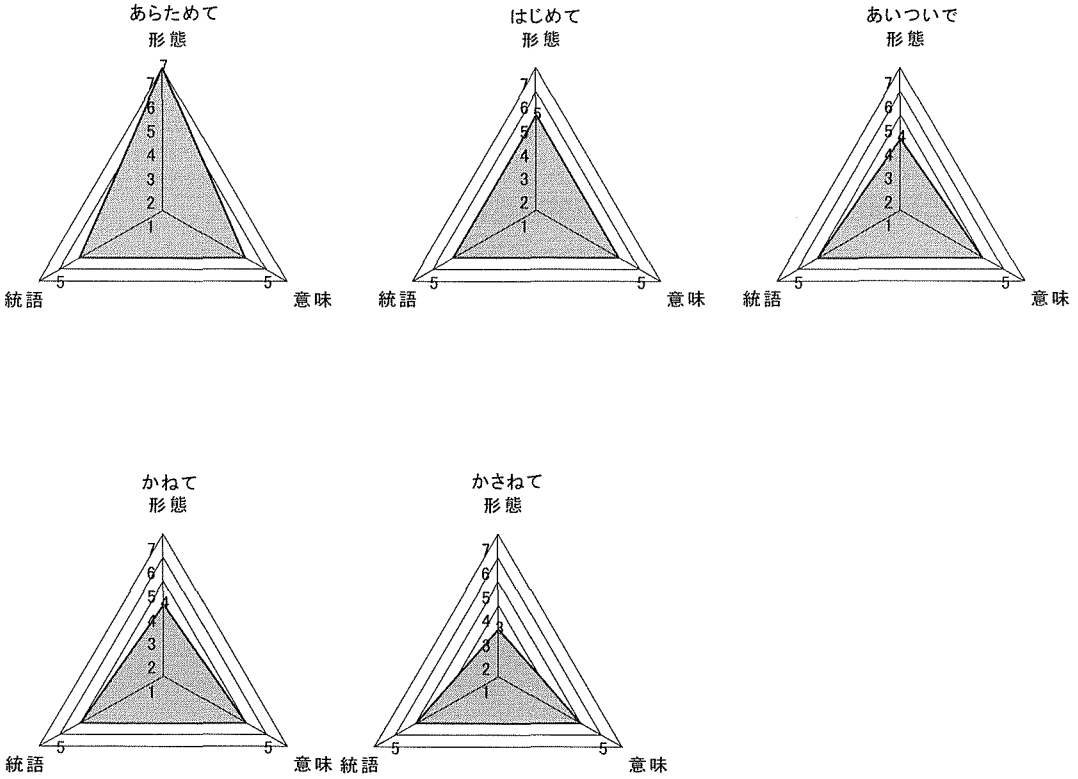
次に、8つの「副詞の種類」ごとにテ形の副詞的成分の副詞度をレーダーチャートに描き、同じ種類の中での副詞度の連続相について検討する。

陳述に関わる副詞的成分



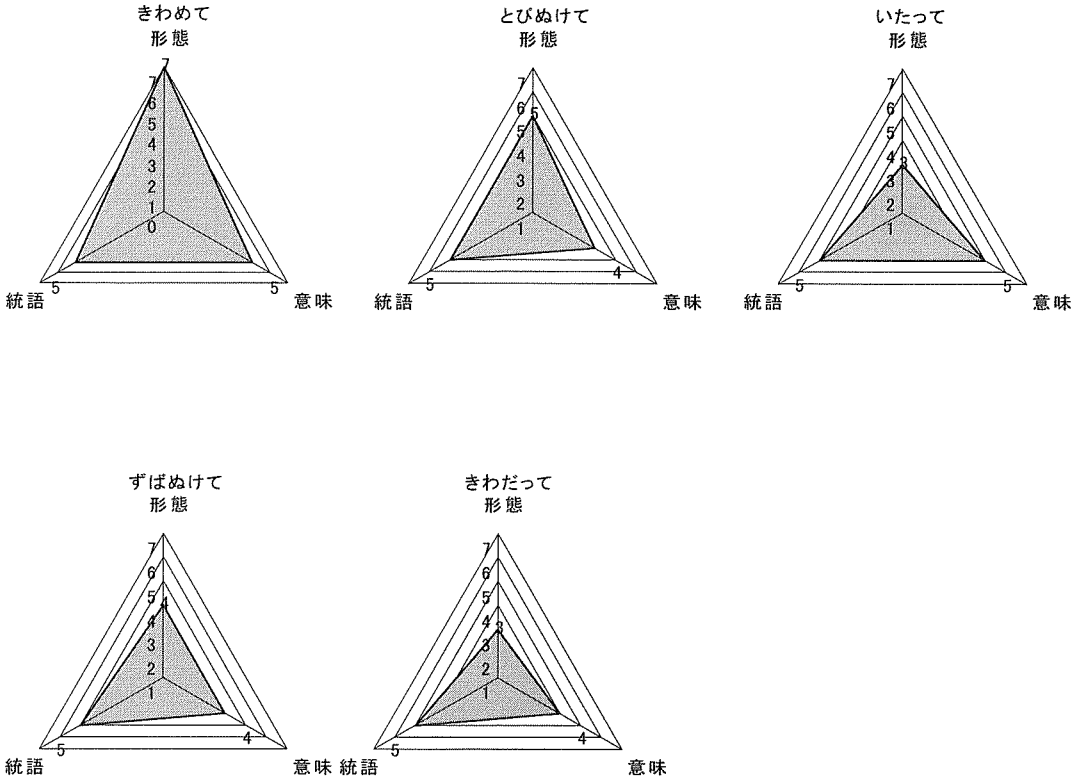
「陳述」は、副詞度が最も大きい種類である。しかし、そこに属するテ形の副詞的成分の副詞度には、「かえって」から「きまって」に向けて、形態的副詞度が縮小（減少）していく連続相が読みとれる。

時・頻度に関わる副詞的成分



「陳述」と同様、「あらためて」から「かさねて」に向けて、形態的副詞度が縮小していく連続相が読みとれる。

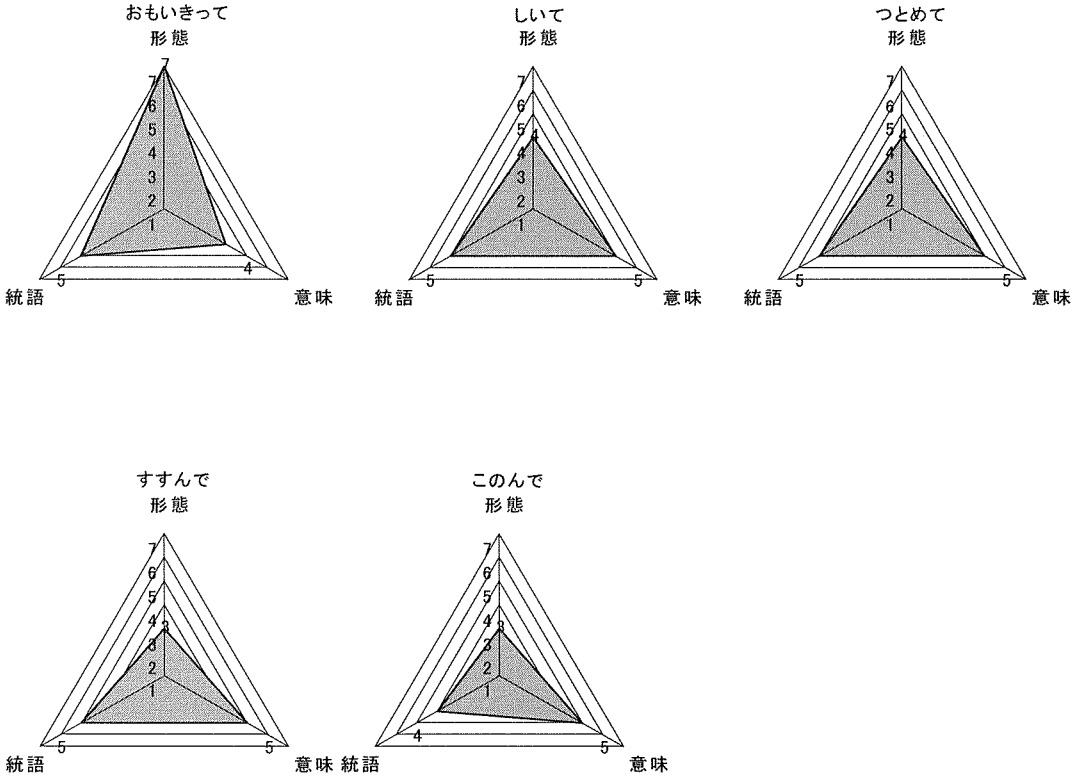
程度に関わる副詞的成分



「陳述」「時・頻度」とは違った連続相（傾向）を示しており、「きわめて」から「きわだって」に向かって、形態的副詞度だけでなく、意味的副詞度も縮小していく。

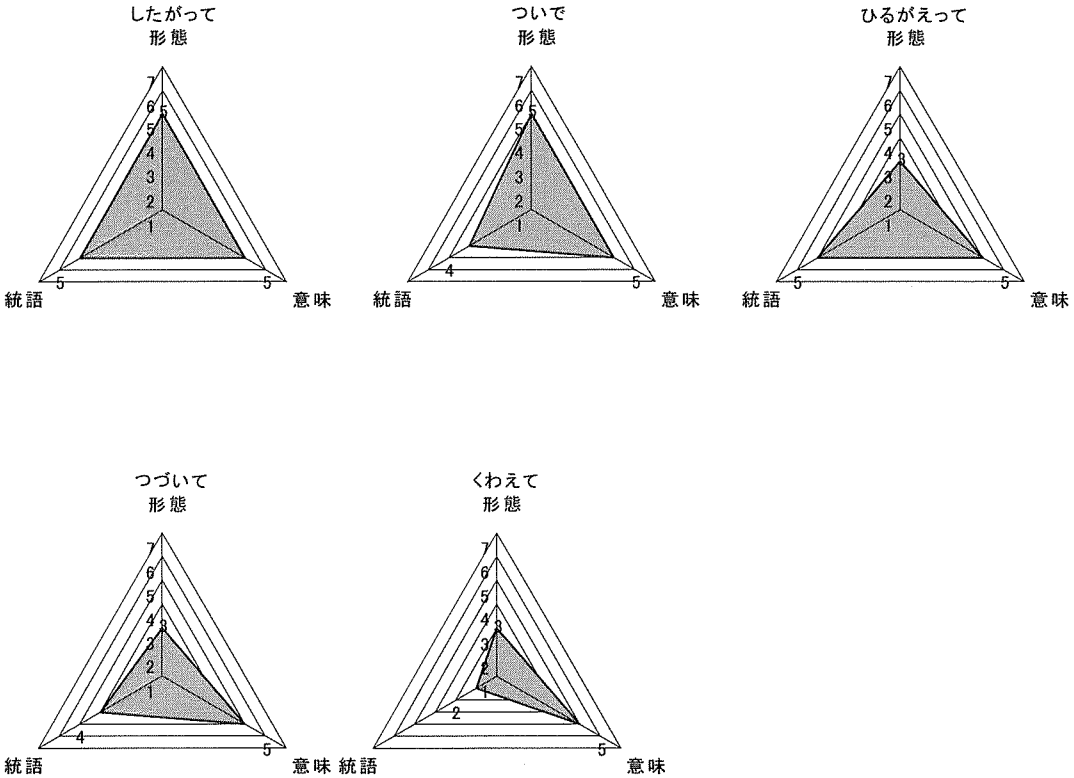
意味的副詞度が縮小する「とびぬけて」「ずばぬけて」「きわだって」には、「～がとびぬけている」「～がずばぬけている」「～がきわだっている」のように、テイル形で特徴を表す形容詞的用法を持つものがあり、また、「とびぬけた＋名詞」「ずばぬけた＋名詞」「きわだった＋名詞」のように、タ形をとって後続名詞を限定修飾する形容詞的用法を持つものがある。このように、程度副詞の用法を持つテ形の副詞的成分には、テイル形やタ形をとって形容詞的用法を持つものが多い。ただし、漢文訓読の影響によって成立したとされる「きわめて」「いたって」[20] には、同じ意味的連合関係を持つテイル形やタ形の形容詞的用法がないという違いがある。

意志態度に関わる副詞的成分



「意志態度」は、「おもいきって」から「このんで」に向けて、形態的副詞度が縮小していく連続相が読みとれる。統語的副詞度はいずれも大きく、「おもいきって」「しいて」「つとめて」「すすんで」は、「～をおもいきる」「～をしいる」「～につとめる」「～にすすむ」というように、本来、格をとるものであるが、副詞用法において非単独副詞用法はまったくない。「このんで」のみ統語的副詞度が少し小さいが、非単独副詞用法のものはすべて「何をこのんで～」という慣用句的用法である。

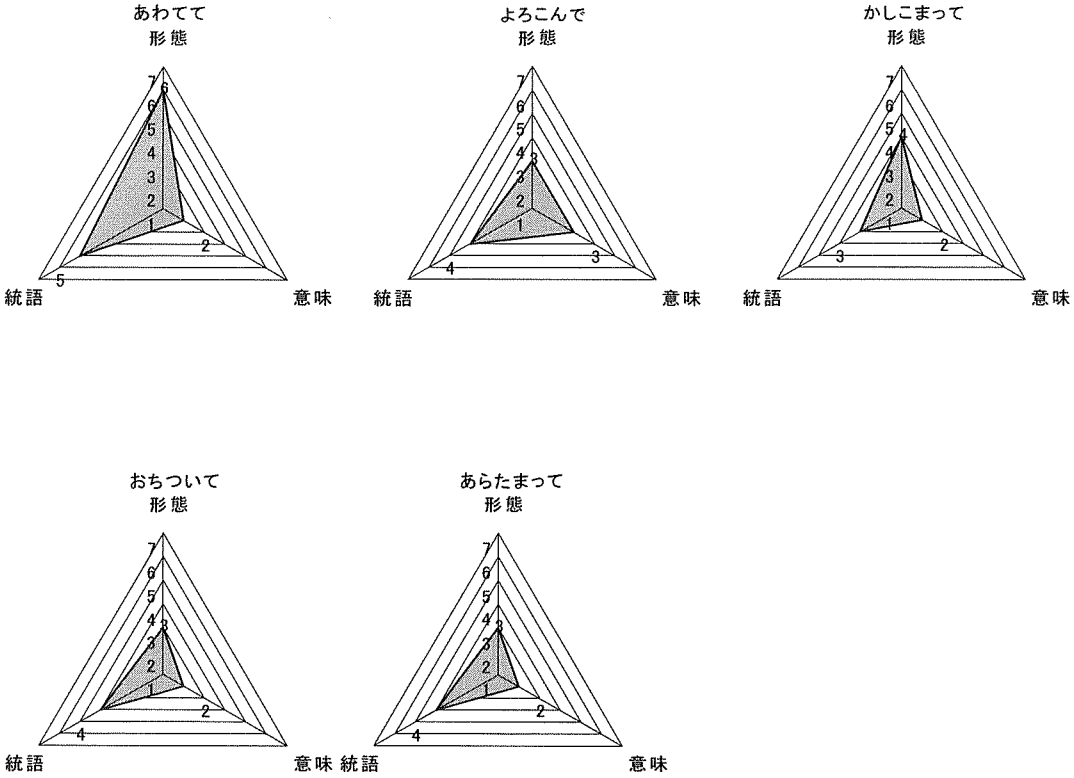
接続に関わる副詞的成分



「接続」は、「陳述」「時・頻度」と違った連続相（傾向）を示しており、「したがって」から「くわえて」に向かって、形態的副詞度だけでなく、統語的副詞度も縮小していく。「ついで」「つづいて」「くわえて」と統語的副詞度が小さくなるのは、「それについで」「それにつづいて」「それにくわえて」という文脈指示表現を前接する非単独副詞用法が多いためと考えられる。

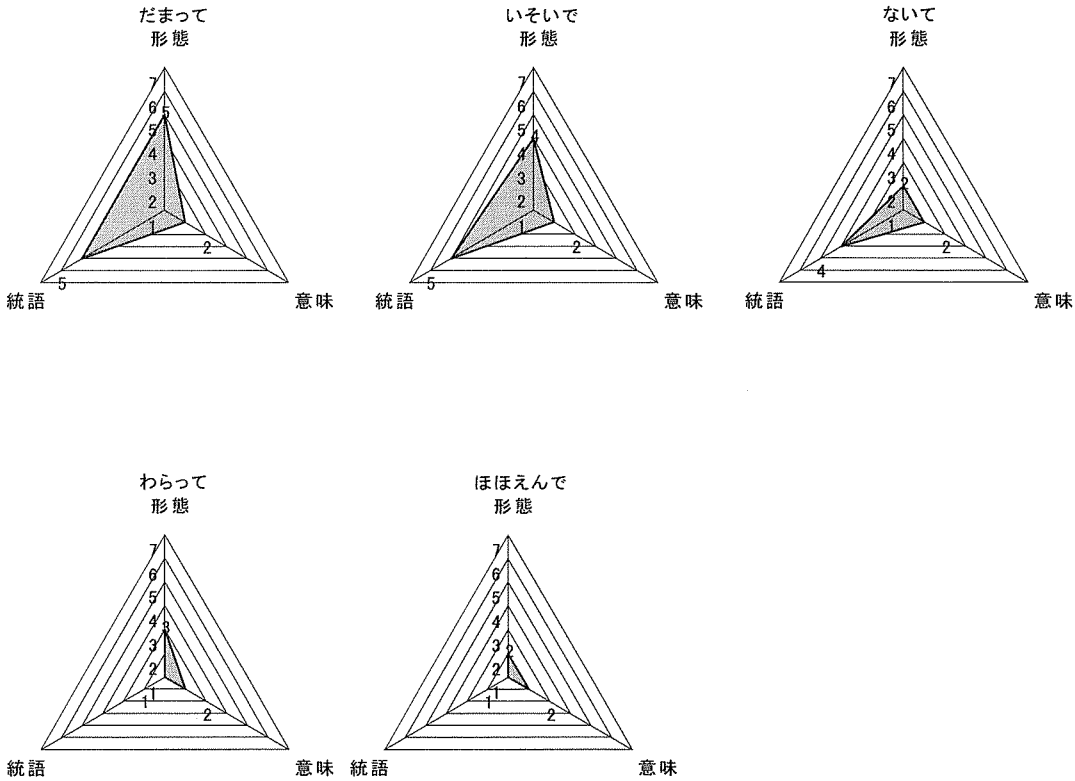
先の「程度」は、統語的副詞度が大きく、形態・意味的副詞度の縮小傾向が見られたが、逆に、「接続」は、意味的副詞度が大きく、形態・統語的副詞度の縮小傾向が見られる。このように、各副詞の種類内部にも連続相があり、そのあり方は副詞の種類ごとの機能や成立事情などによって異なっている。

主体の心理を表わす副詞的成分



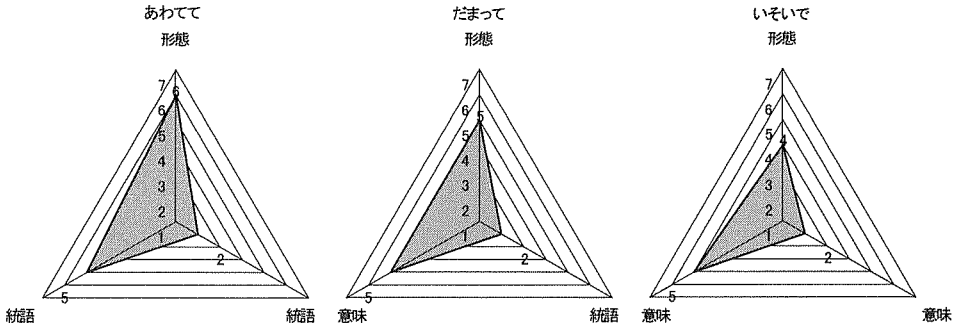
「主体の心理」は、「あわてて」から「あらたまって」にかけて、形態・統語的副詞度が縮小していく。意味的副詞度は、「よろこんで」のみ少し大きいが、それ以外はすべて小さい。「よろこんで」は本稿では「主体の心理」に分類したが、主体が「よろこんで～した」という、動きに伴う主体の心理的状態を表わす用法のほかに、「(後続動詞の内容を) よろこんでする (します)」というように、動きに伴う主体の「意志態度」を表わす用法もある。前者の用法は、単に事態に伴う「主体の心理」といえるが、後者の用法の場合、文末表現を遡及させて「私はよろこびます」といえないことからも、単なる「主体の心理」から「意志態度」へと意味用法にずれが生じている。

主体の様子を表わす副詞的成分



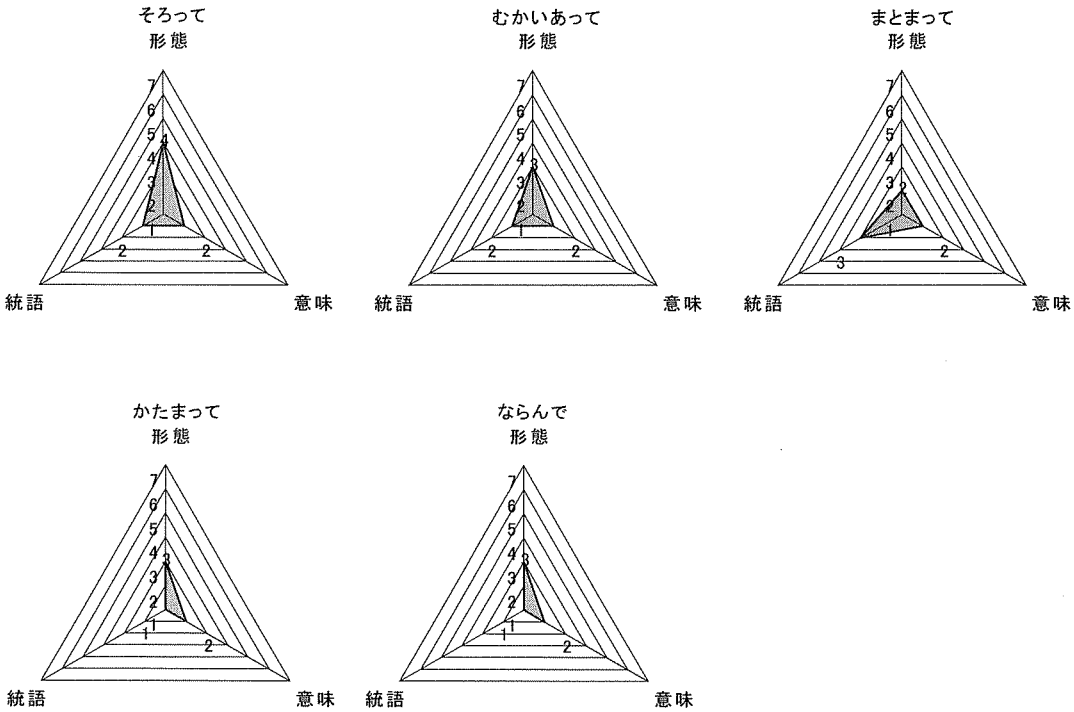
「主体の様子」は、所属するテ形副詞的成分の副詞度に最も大きなばらつきがある。意味的副詞度はすべてが非常に小さく、形態・統語的副詞度が大きい「だまって」「いそいで」から、形態・統語的副詞度が小さい「わらって」「ほほえんで」にかけて縮小している。「わらって」「ほほえんで」の統語的副詞度が小さいのは、他の副詞的成分に修飾されるものが多いためである。

「だまって」「いそいで」は「あわてて」とレーダーチャートが似た形を示している。「あわてて」は本稿では「主体の心理」に分類したが、「あわてた様子で～」とも置き換えられるように、「主体の様子」の側面も備えている。このように、目に見える主体の外的状態である「主体の様子」と、目には見えにくい主体の内的状態である「主体の心理」は、連続していると考えられる。



また、これらは、非単独副詞用法が非常に少ないため、統語的副詞度が大きい。形態的副詞度も大きく、他の活用形の使用数に比べて、相対的に副詞として使用される頻度が高い。この3語が先行研究においてしばしば副詞とされているのは、形態的副詞度と統語的副詞度が大きいためかもしれない[21]。ただし、意味的副詞度は小さく、先行研究の副詞との指摘に反して、この３語を副詞として認定している辞書は一つもない。

複数主体の様子を表わす副詞的成分



副詞度が全体的に小さく、この内部に連続相を見ることはできない。「複数主体の様子」は、「複数主体（が）～して」という主語の数が複数になる場合と、「AがBと/に～して」という参与者の数が複数になる場合がある。いずれの場合も「事態の参与者＝動作主体」が複数となることが基本的な用法である。統語的副詞度が小さくなっているのは、「AがBと/に～して」という表現があるためと考えられる。

8．結論と今後の課題

以上、テ形の副詞的成分について、その「副詞度」と「副詞の種類」との関係を、「辞書の副詞認定状況」をも加味して分析した結果、以下のことが明らかとなった。

テ形の副詞的成分の副詞度は、その副詞的成分の文中での機能、すなわち、副詞の種類と、ある程度相関している。「陳述」と「時・頻度」の副詞度が最も大きく、次いで、「意志態度」「程度」「接続」がこの順で続き、「主体の心理」「主体の様子」「複数主体の様子」（「状態修飾成分」）の副詞度は小さい。このような結果は、いわゆる情態副詞のうち、「時・頻度」「意志態度」と「状態修飾成分」は、性質が異なり、分けて考えるべきであることを示している。

各副詞の種類の間で、副詞度の大きさに違いが見られるのと同時に、各副詞の種類内部でも、副詞度の大きさに違いが見られ、連続相が存在する。さらに、その連続相のあり方は、副詞の種類ごとの機能や成立事情などによって異なっている。

また、副詞度の大きいものは、先行研究や辞書で副詞と見なされるものが多いが、副詞度の小さいもの（状態修飾成分）が副詞と見なされることは少ない。

「状態修飾成分」は、副詞ではなく、形容詞と見なす説があるのは前述した通りである。これらは、他の活用形の使用数も多く、意味的な隔たりも小さく、他の副詞的成分に修飾される非単独副詞用法が多く、形容詞・形容動詞連用形と似ているものである[22)]。辞書が形容詞・形容動詞連用形を副詞としない点でも共通した性質を持つ。

逆に、鈴木（1972）や新川（1996）のように、テ形の状態修飾成分の一部を副詞と見なす説があるが、これらの説では形容詞・形容動詞連用形の状態修飾成分も副詞として認めており、ここでもテ形の状態修飾成分と形容詞・形容動詞連用形の状態修飾成分の性質の共通性が確認される。

本稿で用いた「副詞度」の算定方法は、テ形以外の動詞由来の副詞的成分だけではなく、形容詞・形容動詞など他の品詞に由来する副詞的成分においても同様に適用できる。また、本稿の「他の活用形の使用数」を「他の曲用の形の使用数」と考えれば、名詞由来の副詞

的成分においても同様に算出することが可能と予測される。このように、「副詞度」を導入して、副詞的成分を分析する本稿の研究は、これまでの副詞研究であまりなされてこなかった他品詞との境界線上に存在する副詞の研究を一歩進めることになると思われる。

なお、形態・意味・統語の三つの尺度の重みが等価であるかどうかは明らかではなく、その点については今後検討していく必要がある。また、三つの尺度は最も一般的なものをとりあげたが、この三つで充分かどうかはさらに検討が必要である。

今後は対象の範囲を広げて同様の分析を試み、本稿の結果と同様の結論が得られるのかを検討したいと考えている。

【注】

1）もし、すべての（調査）辞書が副詞と認める「きわめて」を「副詞」と呼び、すべての辞書が副詞と認めない「だまって」「あわてて」などを「副詞的成分」と呼び分けるとすれば、辞書によって副詞認定にばらつきがある「すすんで」「よろこんで」などをどちらの用語で呼ぶべきか混乱が生じてしまうため、統一して「副詞的成分」と呼ぶことにした。

2）これらは、どの副詞の種類に分類すべきか迷ったので、現時点では「その他」にしてある。

3）ただし、渡辺（1971）の定義に従えば、これらは「体言」ではなく「用言（形容詞）」に位置づけられるべきである。このことは、林（2004）で詳しく述べたので参照されたい。また、渡辺（1971）は動詞テ形に実質的連用の職能を認めないため、連用形ではなく並列形としている。しかし、単独で連用の職能を持つものは、用言の連用形と認めるべきである。渡辺（1971）の規定では実質的連用を担う用言は形容詞であるので、単独副詞用法を持ち、かつ、非単独副詞用法も持つテ形は、「用言（形容詞）」とするべきである。

4）詳しい語例については林（2006）を参照されたい。ただし分類や所属語については多少の修正を加えている。また、分類に迷うものや二つの分類にまたがるものもある。特に、「意志態度」と「主体の心理」との分類は不明瞭に見える。「意志態度」は、主体がどのような意志や態度をもってその動きを行うかの意図性に関わる側面を限定修飾するものであるのに対して、「主体の心理」は、動きに伴う主体の心理的側面を詳しく限定修飾するものである。両者の違いは、「主体の心理」は「あわてる」「おちつく」のように基本的に主体の内的心理状態を表す自動詞であり、その心理は主体がコントロールできないものが多い。一方、「意志態度」は「～をしいる」「～につとめる」「～をおもいきる」「～をこのむ」のように格を取ることを基本とするものである。また、「（後続動詞の内容に）つとめてする」「（後続動詞の内容を）このんでする」というように、後続動詞の内容と関係を構成しているものである。両者にまたがる用法を持つものも多いが、その場合、その語形のうち数の多い用法のところに分類した。分類名およびその所属語については、今後もさらに検討を続けたいと考えている。

5）二次資料からも採取したものは、「6．結果」で提示する表1に示す。二次資料は分量的に一次資料の約9倍である。二次資料を追加しても使用度数20を超えない語もあるが、各分類5語ずつとるために、それらの語も分析対象に含めた。

6）この3つの尺度以外にも副詞度を計る尺度があるかもしれない。たとえば、文の中のどの位置に出現するかの語順の問題、否定のスコープに入るか否か、取立てが可能か否か、共起制限の強さなどである。しかし、それらを調べて得られる結果は、副詞の種類の違いによるものとなることが予想される。また現時点では、数量化が容易ではない。これらについては今後の課題としたい。

7）項目執筆担当工藤浩氏。波線は本稿筆者による。

8）『国立国語研究所報告21現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊（1962）には以下のように書かれている。

〔前に立つ要素がその助詞・助動詞に限って結びついたり、その結びつき全体の意味が著しくずれたりした場合の、その助詞・助動詞〕

例：（略）総じて　大して（後略）

9）同語異語の判別は、基本的に国立国語研究所雑誌90種語彙調査の基準に従った。ただし、以下の二つについては、『日本国語大辞典（第二版）』の見出しの立て方や記述を参照し別語と見なした。「おもいきった」は連体詞として見出しに立項されているため、連体詞としての用法のものは、「おもいきって」の他の活用形の使用数に含めなかった。「つとめて」は、「～につとめる」という意味のもののみを他の活用形数量として認め、「～をつとめる」という意味のものは含めなかった。

10）中止の機能を担うか副詞の機能を担うかの判定には、テ形の箇所で文を途中で止め、「そして」や「それから」などの接続詞で文を繋げたときに、元の文の意味が損なわれない場合を中止の機能を担うものとした。副詞の機能を担うものの規定を厳格にするためにも、判断に迷った場合は、副詞の機能を担うものの方には含めなかった。

11）意味的に隔たりがあるものについては厳しく判定し、非文か否かの判定に迷った場合は、隔たりがあるものとは見なさなかった。意味的に隔たりがあるか否かの判定にこのようなテストフレームを設定することが不適当ではないということが、先行研究の副詞の規定からも伺える。川端（1983）は、連用修飾語になる動詞テ形を、「動詞的格の衰弱を経て固定した――すなわち一種の形容詞化に他ならぬ装定語」「形容詞文的に了解すれば、この段階に属する連用の不完全形容詞」とし、「形容詞文的な修飾被修飾の関係の範囲に、副詞の属する場所はない」としている。「或る語が概念的な連用修飾に立つということは、その文の述語を資格上の主語として自ら装定的な述語であること、その文の主語を資格上の主語として自ら述定的な述語であることとの、その統一として解釈される」とされている。本稿で採用したテストフレームは、文の主語と主述関係を構成しているか否かのテストである。主述関係を構成しているものは連用修飾語（副詞ではないもの）であり、逆に主述関係を構成していないものは副詞であると考えることができる。

12) いわゆる情態副詞のうち、「とてもゆっくり話す」のように他の成分によって修飾されるものもあるが、渡辺（1971）のように、他の成分によって修飾されるものは副詞とは見なさないという説もある。また、先述したように、川端（1983）でもこれらは副詞とは見なされていない。

13) かかり先の判断に迷ったものもあったが、明らかにテ形の副詞的成分だけにかかると思われるもののみを非単独副詞用法と見なした。

14) ある集団内でのデータについて、集団の平均値を$\bar{x}$、標準偏差をSとすると、xのz評点（z-score）は$z=\frac{x-\bar{x}}{S}$である。また、7段階の評定尺度は、-2.5から+2.5までのz評点を0.7きざみに区分し、値の高い段階から順に7～1の数字を付与したものである。z評点については、松原（1996）を参照した。このような尺度を利用した研究に、石井（2007）がある。「わらって」の統語的副詞度のz評点は-2.63となったが、評定尺度は1とした。

15) 副詞（或いは接続詞）と連語の二つの品詞表示がある場合は、連語の存在を重く見て1点とした。

16) 意志態度と程度は合計評定尺度の上では、13.8と同じ値であるが、合計副詞度の平均値では、意志態度が2.272、程度が2.203と、若干ではあるが意志態度の方が大きい値となっている。

17) これは先行研究における「様態の副詞」にほぼ該当する成分である。

18) 仁田（2002）では、「狭い意味では様態の副詞から外れると思われる、周辺的なタイプ」と明記されている。情態副詞の内部分類における「意志態度」については工藤（1980）や石神（1987）に詳しく書かれている。

> また意味の面では，その名の如く質的ないし量的な状態を表わすものが多数を占めるが，そのほか，「かつて・あらかじめ・しばらく」など時に関するもの，「わざと・あえて・ことさら（に）」など意志態度的なものなども，通常この副詞に入れられて，まとまりはよくない。（略）その他も一口に動詞を修飾するとはいっても，動詞のどの側面とかかわるかとか，どんな種類の動詞と結びつくかなど，動詞の細分の問題と並行して，今後さらに整理・細分される余地を残しているように思われる。（工藤（1980））

> ここに課題とした情態副詞は，いわゆるオノマトペである。情態副詞に含められるものはこれに限らない。「かつて・しばしば・まだ・もう」などの時に関するもの，「あらかた・すべて・ほとんど」などの数量に関するもの，また「あえて・わざと」といった行為の意志的態度の様態に関するものなどが含まれる。構文の述語用言（主に動詞）を詳しくするといはいっても，これらが修飾成分となる修飾関係は一様ではない。構文関係の精密な分析が要請される。（石神（1987））

19) 「よろこんで」が辞書に載るときは「意志態度」の用法であり、「心理」を表わす「状態修飾成分」から意味用法的にずれが生じている場合である。

20) 『日本国語大辞典（第二版）』の記述による。

21）鈴木（1972）・奥田（1989）・新川（1996）等。ただし、奥田（1989）は、「ならんで」も副詞として認めているが、これは合計評定尺度が6であり、「あわてて（13）」「だまって（12）」「いそいで（11）」に比べて小さい値である。

22）工藤浩（2000）にはこのことに関して以下のような見解が示されている。

そして、ことがら的な〈修飾語〉として働くいわゆる「情態副詞」の大半は、用言へ「（不完全）形容詞」として送り返すことになるのではないか。それは、「形容詞」の側の、〈性質〉や〈状態〉や〈様態〉といった〈静態〉性の「意味の体系性」にとっても、むしろ好ましいことではないだろうか。

【引用文献】

石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房　pp.247-266

石神照雄（1987）「情態副詞の修飾」『ケーススタディ　日本文法』おうふう　pp.84-89

奥田靖雄（1989）「なかどめ――動詞の第二なかどめのばあい――」『ことばの科学』2　むぎ書房　pp.11-47

川端善明（1964）「時の副詞（上・下）」『国語国文』33-11・12

川端善明（1983）「副詞の条件」『副用語の研究』渡辺実編明治書院明治書院

工藤浩（1980）「副詞」の項目『国語学大辞典』東京堂出版　pp.744-745

工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』渡辺実編明治書院

工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3　モダリティ』岩波書店　pp.161-234

国立国語研究所（1962）『国立国語研究所報告21現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊

国立国語研究所（1964）『国立国語研究所報告25現代雑誌九十種の用語用字』第三分冊

鈴木重幸（1972）「第15章　副詞」『日本語文法・形態論』むぎ書房　pp.461-478

高橋太郎（2003）「第９章　動詞が動詞らしさをうしなうとき」『動詞九章』ひつじ書房　pp.259-266（初出　高橋太郎（1983）「構造と機能と意味―動詞の中止形（～シテ）とその転成をめぐって」『日本語学』2巻12号）

中右実（1980）「文副詞の比較」国広哲弥編（1980）『日英語比較講座　第２巻　文法』大修館書店　pp.157-219

新川忠（1996）「副詞について」『教育国語』2・21　むぎ書房　pp.9-18

仁田義雄（2002）『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版

林雅子（2004）「情態副詞をめぐって」『龍谷大学国際センター研究年報』第13号　龍谷大学国際センター　pp.3-14

林雅子（2006）「動詞のテ形・連用形に由来する副詞的成分の量的差異」『待兼山論叢』

第40号　日本学篇大阪大学文学会　pp.1-17
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法－改定版－』くろしお出版
松原望（1996）『わかりやすい統計学』丸善　pp.85-88
宮島達夫（1972）「第３部１．動詞の意味と文法的性質」『動詞の意味･用法の記述的研究』秀英出版　pp.675-679
渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房　pp.212-221

【調査資料】

〔一次資料〕

「新聞」

『ＣＤ－毎日新聞'98年版』朝刊社会面－全国版新聞記事

「文学作品」

小説・随筆等　作者生年1900年以降のもの15冊（１作家１作品以内とした）

「論説文」

新書15冊（１著者１冊以内とし、CASTEL/Jのデータを使用した）

〔二次資料〕

「新聞」

朝日新聞・毎日新聞・読売新聞・日経新聞・産経新聞の社説2005年１月～2007年６月末までの２年半分　4210編

毎日新聞余禄　1950年・1960年・1970年・1980年・1990年・2000年

「文学作品」

小説・随筆等　作者生年1900年以降のもの275冊（１作家３作品以内とした）

（紙幅の都合上、作品名は省略した。以上の資料の中に、他の文献からの引用があった場合は対象から外す。）

【辞書出典】

『例解新国語辞典』第７版　林四郎他編　三省堂　2006年
『大辞林』第３版　松村明編　三省堂　2006年
『新明解国語辞典』第６版　山田忠雄他編　三省堂　2005年
『講談社国語辞典』第３版　阪倉篤義、林大監修　講談社　2004年
『新選国語辞典』第８版　金田一京助他編　小学館　2002年
『学研現代新国語辞典』改訂第３版　金田一春彦編　学習研究社　2002年

『三省堂国語辞典』第５版　見坊豪紀他編　三省堂　2001年
『日本国語大辞典』第２版　日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編　小学館　2000年－2002年
『新潮現代国語辞典』第２版　山田俊雄他編　新潮社　2000年
『岩波国語辞典』第６版　西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫編　岩波書店　2000年
『旺文社国語辞典』第９版　松村明、山口明穂、和田利政編　旺文社　2000年
『集英社国語辞典』第２版　森岡健二他編　集英社　2000年
『広辞苑』第５版　新村出編　岩波書店　1998年
『日本語大辞典:講談社カラー版』第２版　梅棹忠夫他監修　講談社　1995年
『新潮国語辞典：現代語・古語』第２版　山田俊雄他編　新潮社　1995年
『大辭典』覆刻版　平凡社　1994年
『学研国語大辞典』第２版　金田一春彦、池田弥三郎編　学習研究社　1988年
『大言海』新編版　大槻文彦著 冨山房　1982年
『角川国語大辞典』時枝誠記、吉田精一編　角川書店　1982年
『大日本國語辭典』修訂新装版第25版　松井簡治、上田万年共著　富山房　1966年

（博士後期課程学生）
（2007年８月24日受付）
（2007年10月９日修正版受付）
（2007年10月31日再修正版受付）
（2007年11月16日掲載決定）